モンスターハンタークライシス

エア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
モンスターハンタークライシス

【Ｎコード】
Ｎ０７０５Ｅ

【作者名】
エア

【あらすじ】
私たちの世界とは僅かに様子の異なる世界の物語。この世界ではモンスターが存在し、自然、そのモンスターを狩るハンターと呼ばれる者達が現れる。これはそんないちハンターの一人、ロン・ウンフェイの物語である。

ここは人とモンスターが住む世界。

この世界にはモンスターが住んでいる。
それこそ人より小さいのから山より大きいものまで様々な形態を持つモンスターが生息し、そのモンスターを狩ることを生業とするハンターとよばれる人間達がいた。

緑に囲まれたここスーメキアもそんなハンター達の溜まり場の一つであるキリシアギルドがある賑やかな街である。

ハンター達は夜には自らの武勇伝を肴に飲み明かし、昼には思い思いの武器を持ち世界狭しと生息するモンスターを狩りにいく。それがハンターの生活だ。
キリシアギルドでは今夜も毒怪鳥ゲリョスを倒したパーティーが呑めや歌えやの大騒ぎを繰り広げていた。

そこに一人の見慣れない旅のハンターが現れる。
その背中には布に包まれた大剣が背負われ、顔は生気なく痩けている。
男はカウンターの前までよたよた歩くと財布をひっくり返し僅かに残った金を差し出だし一言、「メシ・・」
と言って倒れ、気絶した。

しばらくして・・

陽気な歌に男は目を覚ました。自らのハンティング成功を祝った歌

を声高々に歌うハンター達とミュージシャンの音楽は抜群の音色を奏でている。

「やっと起きたか」

振り向くとカウンターで赤いウエイトレスの女の子が呆れた顔で男を見つめ、その手にある食べ物が山盛りにつまれた皿を男に差し出した。

「アンタの持ち金じゃなにも食べれなかったけど、運は良かったみたいね。今日は彼等のおごりよ」

命の恩人である人々を指差すウエイトレスだが男はそれを無視して皿に盛られた食料を残飯を漁るネコのような勢いで食いあさる。

「そんな勢いでメシ食う人間初めてみたよ・・」

呆れ顔のウエイトレスを尻目に全てを完食した男は

「御馳走様でした」というとスッと立ち上がった。

「ありがとう。スゲーうまいメシだったぜ」

「そいつはどーも。でも礼を言うならあっちにね」

ウエイトレスが再度ハンター達を指差すと、ハンター達も自分がおごった人間が目を覚ましたと浮かれながら一人こちらに近づいてきた。

「いや～少年食ってるか～！？どこの誰とも知らんが今日はめでたい日だから遠慮せずにガツガツ食べて呑んでくれよ～！」

「おごってくれてありがとう。スゲー助かりました」

「そんな畏まらなくていいから君もこっち来いよ！え～っと、名前なんていうんだ？」

「オレは、ロン・ウンフェイ。ウンフェイかロンとかって呼ばれてます」

「そうかそうかウンフェイ君か。私はクラーム。今日は我々、鷲の爪団が見事ゲリョスを討ち取った日なんだおおいに祝ってくれたまえよ」

クラームは上機嫌にウンフェイを連れて台の上に登る。

「みんな～呑め～！歌え～！我々は誇り高きハンターだ！だがハンターには危険はつきもの。いつ死ぬともわからん。だから呑め～！歌え～！我々は明日死ぬかもしれんのだ！楽しい時に目一杯たのしむぞ～！」

それからクラーム達の宴会は朝まで続いた。

翌朝

日が登りウンフェイが目を覚ますとクラーム達は満足そうな顔でまだ寝ていた。

「おはよーさん」

ウエイトレスはデカい洗濯カゴに山盛り洗濯物をつめてそれを干していた。

「あ～おはよ、え～と名前は？」

「私の名前はカグラ」

ウンフェイが辺りを見回すと嵐でも通ったかのような散らかりようだ。
「こんなに呑んで金とか大丈夫なんか？ゲリョス討伐って賞金そんなに高くないんじゃないか？」
カグラはフンッと鼻で笑った。
「そんなこと心配しないでいいのよ。昨日彼らが討伐したゲリョスは金冠サイズの超大物で近隣の町や村にもかなり被害がでてたからまだまだお釣りが残るくらい金持ちなのよ」
洗濯物を全て干し終わるとカグラは台所について朝食の準備を始める。
「ところでアンタはどっからきたのよ」
「シュレイド地方の方から」
「こんな田舎まで何しに？」
トントンと包丁がリズミカルに鳴る中ウンフェイは真剣な顔で窓から空を見上げた。
「ある、龍を探してここまで来た。」
「龍？それってリオレウスとかリオレイアとかの飛竜種のこと？」
「違う、オレが探しているのは――――」
ウンフェイの口から言葉がでる瞬間、
「腹、減った～！！朝飯だ！」
会話を遮るようにクラーム達が起き始め結局ウンフェイから龍について何も語られる事はなかった。
「みんな、いっぱいあるから満腹まで食えよ～」

皆が朝飯を食べている中ウンフェイの元に一羽の鷹がやってくると一枚の手紙を置いていった。
赤い蝋燭の見たこともない印が押された手紙の中を読むとウンフェイの顔色がさらに豹変する。
「なんかあった？」
カグラが尋ねてもウンフェイは返事をせず、自らの布に包まれた大剣を背負い込むと何も言わずに出て行こうとするウンフェイをカグラが引き留めるが、その顔をみて思わず手が引けた。
「カグラ、早く非難した方がいい。ここは戦場になるかもしれない。」
そう言い残して去っていったウンフェイの顔は殺気渦巻くハンターの顔だった。

後に残されウンフェイの豹変ぶりにポカンとするカグラの意識を戻したのは街に非常事態が発生した事を告げる不幸の鐘の音であった。

～スーメキア中央広場～

中央広場に集められた人々が町長から告げられたことは、
「空の王」とまで呼ばれる雄火竜リオレウスの接近であった。
「はっ、何かと思えばリオレウスくらい私達が撃退してみせます」
少し不自然に笑いながらクラーム達が名乗りをあげる。
金冠サイズのゲリョスを倒した彼等の実力はかなりのものだが、それでも町長は暗い顔をしていた。
「クラーム、君たちは非常に頼りになるが今回ばかりは非難してく

れ・・」

「なぜです町長！？」

町長は懐からウンフェイが持っていたものと同じ蝋印が押された手紙を取り出し、クラームに渡した。

「これは！？」

その内容を見てクラームは愕然とする。

今回接近中のリオレウスの詳細とかかれた覧。

体長約２２００センチメートル

（金冠サイズ）

こちらでも三度に及ぶ撃退を試みたが撃退には至らず、このリオレウスを上級に認定。

「とても倒せるものではないだろう」

町長はハァとため息をつくと人々は非難を開始した。

「町長！」

カグラが町長を呼び止める。

「この町はどうなってしまうんですか！？リオレウスに破壊されるのを見てるだけなんですか」

「大丈夫だよカグラ。ギルド本部が偶然この町に滞在していた王立書士隊の所属のハンターに討伐を依頼してくれたらしいから」

「一人だけですか・・？」

「一人だけだが書士隊が派遣してきたハンターだ期待はできる。確

か昨日この町に到着していてギルドで一夜を過ごすと言っていたらしい。会ってないか？」
カグラの頭の中で該当者は一人だけ。
「ロン・ウンフェイ・・」

カグラがギルドに帰ると朝の散らかりのまま、空は曇り風吹き荒ぶ天候でまるで廃墟のような状態だ。
「ハァ・・」
床に落ちたコップや皿を拾う。
不意に涙がこぼれた。
毎日すごしてきたこのギルドが、町が破壊される。また・・
火竜が暴れた跡には何も残らないことをカグラは知っていた。
「何泣いてんだ」

気がつくといつの間にかウンフェイの姿があった。
「泣いてなんか、ない！それよりアンタ！国立書士隊なんだって？アンタなんかに上級リオレウスが倒せるの！？」

ウンフェイは腕をまくり、龍に剣を突き刺しているようなタトゥーをカグラに見せた。
「コイツは滅竜士の紋章。王立書士隊の中でも戦闘専門部隊の証だ。任せとけよこの町はオレが守るからよ」

「うん・・任せた」

町を見下ろせる高台の上からウンフェイは町を荒れる空を見ている。
「なんか、おかしい」
朝はあんなに晴れていた空が嵐の前のようになり、雷鳴すら聞こえ

る。

「ギャーギャー」

突如ウンフェイの背後からガブラスの群が襲い来る。

太刀筋が一線二線三線と舞ったかと思うと全てのガブラスは力無く地に伏した。

「やっぱりおかしい」

ガブラスはその出現自体があるものの襲来を予兆する飛竜の一種だ。何か違和感を感じていると次にウンフェイの下にやってきたのはクラームだった。

「ウンフェイく〜ん！」

「クラームさん、どうしたんですか？非難したんじゃないんですか？」

「いちハンターとしてモンスターから逃げれるわけないだうが！ゲリョス討伐の賞金を全部使って装備も新しくした。準備は万全だ！」

「はは、頼もしい限りです」

「さぁ、かかってこいリオレウスぅぅ！この鷹の爪団リーダーのクラームが相手になるぞ〜！」

クラームが大声で叫んでいると、鈍く低い鳴き声が聞こえた。

「どうやら来たらしい」

ウンフェイの視線の先、暗雲を突き破り、赤いウロコのリオレウスがその姿を表したが、その後を追って更に何かが姿を表した。

「なんだあのモンスターは・・？リオレウスを、襲ってる？」

クラームは一度見たことのないそのモンスターに釘付けになる。

リオレウスを追ってきたそれは高速で飛ぶリオレウスをたたき落とすと、馬乗りになるようにリオレウスに乗りかかり、首を噛み砕き、翼を引き裂き赤子の手を捻るようにリオレウスの息のねを止めた。
「ありゃあ、クシャルダオラじゃねぇか・・！！」

「クシャルダオラ！？それじゃああれが古龍？」

古龍クシャルダオラ
鋼龍亜目　クシャナ科
別名、風翔龍や綱龍と呼ばれる古龍で雪山を中心とした広範囲に生息し、金属質の外殻をもち嵐を呼び、その身には風を纏っているため並のハンターでは近づくことすら困難である。
最新の研究ではこの風は角と連結した内蔵器官によるものらしいことがわかっている。

「クラームさん、逃げるなら今のうちですよ。アイツ等の強さはそれこそ天災級だ。最悪死ぬかもしれない」

「ふ、ふふ、何度も言わせるな。逃げれるわけないだろう・・？」
発言とは裏腹に顔は青く冷めきっていた。
「グォォォォオオン！！」
クシャルダオラの轟鳴が雷鳴の如く町中に轟き、その眼孔がウンフェイ達の姿を捉え、竜巻にも似たブレスが吐き出される。
「跳べ～！！」
高台に直撃したブレスの爆風に乗ってウンフェイとクラームの体が宙を舞う。

「イヤッホゥゥゥ〜！！」

着陸したウンフェイは背中の大剣に手をかけた。
巻き付けられた布を剥ぎ取り現れたのは蒼の威厳と桜の気品を併せ持った巨大な刀剣。その名は《妖かしの君主》を意味する大剣アールヴリード。

クラームも片手剣ポイズンタバルジンを構える。
「さぁ〜狩りの時間だ！」

左右に別れ、距離を詰める二人を飛翔し、ブレスを吐きながら迎えうつクシャルダオラ。

「これでも喰らえ〜！」
クラームの閃光玉が一時的にクシャルダオラの眼を潰しその飛翔も止める。
「今だウンフェイ君！」

大剣アールヴリードの刃がクシャルダオラの鋼皮を切り裂く。が、鋼鉄の硬度を誇るその表皮に守られたクシャルダオラに致命傷を与える事はできない。
「なんつう硬さだ、こっちの武器がおかしくなっちまう！」

「次は私の番だ〜！」切りかかろうとしたクラームの体を強風が押し戻す。
「クソこれじゃあ攻撃を当てられないじゃないか、」

再び視界が確保されたクシャルダオラは二人目掛けて嵐にも似た突風と共に突進してくる。
「うぉおおお！」

ウンフェイの大剣がその突進を防ぐが同時に刃こぼれしてしまう。
「まずはあの風をどうにかしなければ」
「確か、クシャルダオラの突風は角を破壊すれば止まるはず・・角を壊すんです、クラームさん！！」
「しかし、こんなに動き回られた上に突風まであったら角に近づくこともできんぞ！？」
「動きなら、オレが止めます！」
足を地面に突き刺し、すれ違いざまにクシャルダオラのその脚を切り裂く。
力を一点に集約したその一撃は鋼鉄の皮膚すら引き裂き、クシャルダオラを転倒させる。
「いきますよ！」
ポイズンタバルジンの毒の刃が何線も斬りつける。
「うぉおおおおお！！」
「グォォォォォ！」
しかし角が壊れる程のダメージは与えられず起き上がるクシャルダオラ。
「なんて硬さだ、ポイズンタバルジンの刃がもうボロボロだ」
「いまのうちに研いでください！」
ウンフェイが閃光玉を放り、その間に武器を研ぐ2人。
「よし、ついでにコイツも仕掛けるか」
地面に何かを仕掛けるかクラーム。
「クラームさん気おつけて！！」
「大丈夫、大丈夫ほらこっちに来いクシャルダオラ！」

初めて古龍と闘うものがよくやるミスの一つにトラップの設置がある。古龍にトラップの類はその意味をなさない。
「さぁ～こい！」

「逃げて！クラームさん！！」
故にクラームの体は宙に舞い、地に伏すこととなる。
「大丈夫ですかクラーム！？」
「ゴフッ、私はいいから、クシャルダオラを、君までやられてしまうぞ・・」

「いいから喋んないで！！」

クラームを抱えて町中を走るウンフェイ。しかしクシャルダオラもただ逃がすわけもなく家を破壊しながら追ってくる。
「ハァ、ハァ、ハァ、」

「私を置いていけ・・、私を・・、死ぬのは恐くない。ハンターになった時からこんな日が来るのはわかっていたことだ、悔いはない、本望だよ・・」

「うるさい！黙ってろ！オレは誰も死なせない。死なせないんだ！！」

「絶対、死なせない、死なせない・・」

クラームは考えた。
自分は今瀕死の状態だ。回復薬はあるが今の状況では使えない。
クシャルダオラを討伐するにはどうしても自分が邪魔になる。なら、役にたてばいいのだと。
「二度あることは三度ある・・」

クラームはフッと笑うと何かを後ろに投げた。
瞬間、凄まじい光が辺りを包む。
「私特製の大閃光玉だ、ざまぁみろ！ついでにコイツも喰らえ！」
クラームが投げたのは自らの武器ポイズンタバルジン。
その刃は左目に刃が埋もれる程深く深く突き刺さった。
「これが私の最後の仕事だ、あとはウンフェイ君、君に任せた。どうかこの町を守ってくれ・・」
「それならとっくに約束してますよ。カグラとね」
「頼んだ、ウンフェイ君」

丁度中央の広場の真ん中でウンフェイとクシャルダオラは対峙していた。クラームは避難させた。町中というのが気になるが今はコイツを倒す。
自然、力がはいる。
ウンフェイは鬼人薬を一気に飲み干すと一度武器をしまい、そしてクシャルダオラの周りを走り出した。
それを回転するように追うクシャルダオラ。
そして、一瞬の隙。
神速の抜刀。
クシャルダオラの尻尾が切り飛び、肉が裂ける。

「グォォオォオオ！！！」
クシャルダオラの叫び声が町中を駆け抜ける。
その眼は血がにじんだように赤くなり、突風がその強さを増し、呼応するように大粒の雨が降り始める。
「これからが第二ラウンドの始まりか、」

クシャルダオラの猛攻が始まる。尻尾を使って立ち上がると左右の腕を交互に振り下ろし、短くなったとはいえ鋼皮に包まれた尻尾を叩きつける。
その全てが一撃必殺の威力が込められ、ウンフェイは死と隣り合わせのこの戦場を必死に生きている。

「ハァ、ハァ、次いくぞ」
しかし、怒りに任せた攻撃だからこそ隙も生じやすい。
死の匂いかおる一撃をよけ攻撃を仕掛けるウンフェイ。次第にその鋼鉄の体は傷にまみれていく。

勝利が見えた気がした。
クラームが投げつけたポイズンタバルジンが幸いした。毒によって内蔵器官をやられたクシャルダオラは突風を起こせなくなった。

「いける・・！！」
油断。
今のウンフェイには僅かにそれがあった。クシャルダオラはすでに弱りはて、飛ぶことすらままならない状態にあった。

それ故に、不意に吐かれたブレスに致命傷を負った。
叩きつけられた煉瓦づくりの壁は崩壊し、その威力のほどがわかる。
「死ぬわけには、死ぬわけにはいかないんだよぉ・・！！」

アールヴリードを杖代わりに立ち上がるが満身創痍のその体は立ち上がるだけで悲鳴を上げた。
「無理なんかじゃねぇんだ・・諦めるわけにはいかねぇんだ・・」
クシャルダオラの口に風が集まり、収束していく。

「かかってこいよォ！！」
ブレスが放たれるその瞬間。

「へばってんじゃないわよ！」聞き慣れた声と共に無数の弾がクシャルダオラに着弾した。
「カグラ！？」

民家の屋根にのるカグラと昨日ギルドにいた沢山のハンター達がいつの間にか中央広場を囲うように集まっていた。
「ウンフェイにばっかいい格好させないわよ！みんな、やっちゃって！！」

「オォー！！」

周りを囲うガンナー達が一斉に麻痺弾を撃ちまくる。
「グォォォォォ！！」

ただでさえ毒に蝕まれている体に大量の麻痺弾。当然その体は身動き一つとれないようになる。
「いっけーウンフェイ！！」

クシャルダオラの視線の先にはアールヴリードを振り上げるウンフェイの姿。
「これで終わりだ！！」

ウンフェイの一撃についにクシャルダオラは倒れた。
「ウォオォオオ！！！！」
町中でハンター達の雄叫びが聞こえる。
「ホントにやりやがったよアイツ！」
「すげぇよウンフェイ！！」
全てが終わった。
「勝った・・」
気が抜けたのかウンフェイはその場で倒れ、気絶してしまった。

起きた時には辺りは祭のような盛り上がりを見せていた。
「お～起きたかウンフェイ君」
松葉杖を尽きながら酒持ったクラームの姿がある。どうやら無事だったらしい。
「お～い皆～！英雄が目を覚ましたぞ～！！」
「ウンフェイやっと起きたの～？」
カグラの元気な声が聞こえる。中央広場の真ん中にはさっきまで激闘を演じていたクシャルダオラの姿があった。
「さぁ～ウンフェイ殿こっちへ」
町長に引かれるまま矢倉の上に上がるウンフェイ。
「あ～、あ～、マイクチャック。あ～今回このスーメキアを未曽有の脅威が襲った。正直この町がもうダメだと思ったのはワシだけではないはずだ。しかしここにいるウンフェイ殿のおかげで見事町は

救われた！みなウンフェイ殿に感謝を込めて、今夜は宴だ～！！乾杯！！」

それから続いた宴。
皆が笑顔を浮かべ、ウンフェイはそれを見て改めてガンバって良かったと思った。

～翌朝～

「もう行くのウンフェイ？」

朝早く、起きているのはウンフェイとカグラだけだ。
「あぁもう回復したし、そろそろ行くよ」

「じゃあせめて皆に挨拶だけでも」

「いや、いいよ。そのクシャルダオラとリオレウスは置いていくから町の復興につかってくれや、じゃあなまたいつか会いに来るよ」

「じゃあ」

昼になってから皆が起き始めた。ウンフェイがもう行ってしまった事、まともに礼も言えなかったことを皆悔やんでいた。

数ヶ月後・・

ウンフェイの残したクシャルダオラとリオレウスの素材を売ることで町は見事復興を遂げた。

～キリシアギルド～

「カグラ、君は最後にウンフェイ君と話したんだろ？」

「え、まぁ・・」

「彼は今頃何してると思う？」

「多分、狩りでもしてるんじゃないかな」

「そうかもな～」

～旧シュレイド城跡～

ウンフェイは巨大な黒龍と対峙していた。

「やっと見つけたぜミラボレアス・・！！」

「グォォォォオオン！！」
けたたましく響く轟鳴。

「さぁ～狩りの時間だ～！！」
ここは人とモンスターが住む世界。

この世界にはモンスターが住んでいる。
それこそ人より小さいのから山より大きいものまで様々な形態を持つモンスターが生息し、そのモンスターを狩ることを生業とする人間を人々は敬意を持って、こう呼んだ、

モンスターハンターと、

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0705e/

モンスターハンタークライシス

2010年10月9日19時56分発行